「標準語のようで標準語ではない愛知県のことば」

朝日祥之(国立国語研究所)

はじめに

私からは,「標準語のようで標準語ではない愛知県のことば」という題目で話題提供をさせていただきます。このテーマで話をさせていただきますが，愛知県の方言については，皆さんのほうが詳しい可能性もありますし，大学で愛知県の方言について講義をなさっている先生もいらっしゃいます。与えられた 40 分を十分に使いながら，皆さんと一緒に愛知県の方言の魅力に迫りたいと思います。よろしくお願いいたします。

私の所属機関である国立国語研究所は，文部科学省所管の研究機関です。日本語についての科学的かつ学術的な研究をおこなう機関です。今日の講演ですが，６つのことを取り上げます。まず，自己紹介をしなければなりませんし，本題に入る前にある告白をしなければいけませんので少しだけ時間をいただきます。

次に愛知県のことばに関して，これまでの研究で明らかにされていること，指摘をされていることをご紹介します。例えば，皆さんにお住まいになっているところをお尋ねした上で，例えば，愛知県，静岡県の浜松市のあたり，岐阜県や三重県などの地域の言葉との関係など，愛知県の言葉の特徴について話したいと思います。実はそれが標準語を使っているかどうかということと関係があります。

個人的には幼少期の頃から東京で生活を始めるまでは「自分は方言なんか使っているものか」という思いでおりました。ところが東京で生活すると「自分のことは方言ばかりじゃないか」ということに気づきました。したがって自分の使っている「ことば」をどのように見なしているのかということも扱いたいと思います。

このスライドの一番下に「気づかない方言!?」と書きました。これは実は普通に使っている言葉が，全国どこへ行っても通じるわけではないということに関係します。この講演ではその具体例をいくつかご紹介します。そして，愛知県の言葉は，これ

からどのようになっていくのか，ということについて私見を述べたいと思います。

自己紹介

私は愛知県の尾張地方の出身です。ここ東三河地方にある愛知大学で，尾張地方の人間が東三河地方に住む皆さんに,「愛知県の言葉はこんなものだ」と紹介することになるわけです。尾張地方の人間が，同じ尾張地方の言葉，また三河地方の言葉をどのようなスタンスで評価をするのか，色々な意味で神経を使います。みなさんの中には,「どうせ，朝日は名古屋の人間なのだから自分たちの地域のことなどわかるはずもない」などとお考えになる方もいらっしゃるかもしれません。ただし私としては，愛知県の言葉の魅力を少しでも多く伝えたいと思っております。その意味でも，お手柔らかにお願いいたします。

私の生まれた名古屋市中川区の出身はいわゆる「下町」になります。名古屋方言の中でも伝統的な方言が残りやすい地域で，実際，尾張地方の方言を扱った論文に私の通った小中学校の学区にある八家(やつや)町が選ばれています。一方で，名古屋大学や南山大学がある地域は，いわゆる上町(うわまち)と呼ばれます。上町と下町とでは，同じ名古屋市内ですが，異なる方言の特徴が観察されると言われています。この点で，本講演で私の使う「名古屋方言」は基本的には中川区を中心とした下町の言葉になることはご承知おきください。

さて，私の勤務先である国立国語研究所には 2004 年より勤務しております。先ほどの紹介にもありましたように，言語変異を研究するところに所属をしております。日本国内外のさまざまな地域（北海道，サハリン，ハワイ，サイパン，アメリカ等）で調査をしていますが，そこに共通しているのはいわゆる「外地(がいち)」と呼ばれる地域を調査対象としている点です。

国立国語研究所は,1948 年に創立された日本語に関する学術調査研究機関です。本年で 70 年目を迎えます。国立国語研究所で進められてきた研究事業のうち，私の担当した調査に西三河の岡崎市で敬語の調査があります。この調査は昭和 28 年（1953 年）に第 1 回の調査を実施してから，約半世紀がたった平成 20 年（2008

年）に敬語の使い方，敬語に対する意見の調査を実施しました。調査は，サンプリングによって選出された岡崎市民の方のお宅に調査員が個別に伺い，話を聞かせてもらいました。調査には合計 4 週間，関連する調査や打ち合わせ，調査報告会を含めると２ヶ月ほど岡崎市に滞在しました。

また国立国語研究所の職員なので，さすが正確な標準語を使うだろうと一般的には思われがちです。私自身，自分の肩書に負けないような言葉づかいをしていると思っているのですが，私の日本語のイントネーションには標準語とは異なるものがあります。その違いについては後で取り上げたいと思います。

愛知県のことば

「愛知県のことば」にはみなさんご存知の通り，尾張と三河で言葉遣いが違います。その違いは文化の面にも見られると思います。私ごとですが，高校を卒業した後，予備校に 1 年通いました。そこで知り合った西尾市出身のクラスメイトが「じゃん・だら・りん」を使っているのを聞いて，かなりショックを受けたこともありました。別の友人から「手紙書きなん」と，相手に手紙を書くことを勧める意味で「なん」と使うことも知りました。これらは尾張の人間からすると随分違和感を覚えます。

今から，今日ここにいらしている皆さんのご出身をおたずねします。差し支えのない範囲で教えてください。まず「三河地方のご出身の方」。 (挙手)　ありがとうございます。それでは「尾張から来た」という人はいますか。(挙手)　同朋ですね。ありがとうございます。「静岡から来た」 (挙手)　若干いらっしゃいますね。ありがとうございました。うれしいです。「その他」の方はいらっしゃいますか。 (挙手)　はい，ありがとうございます。

三河地方の方におたずねしたいのですが，三河のなかの西と東ですが，例えば，豊橋市の方からしますと，この岡崎市はどのようなところでしょうか。逆に，岡崎市の方からしますと，豊橋市はどのようなところでしょうか。両地域は同じようなところでしょうか?　違うでしょうか?　私のような尾張地方の者からすると，豊橋

市は愛知県の反対側にある大きな町で，岡崎は愛知県の真ん中にある町というイメージなのですが。いかがでしょうか。どうやらいろいろな意見がありますね。

例えば，豊橋市の人が岡崎高校に入学するとします。そうすると「おまえ，何やってんだ。時習館高校へ行けよ」というようなことはありますでしょうか。名古屋の東海中学校まで行こうとすると，「あんなところ行くなよ」となるんでしょうか。名古屋まで仕事をしに行っているという場合の評価はいかがでしょうか。名古屋ではなく東京に行ったほうがいいと言われるようなことはありますか。おそらくいろいろなご意見があると思います。例えば，豊橋市の方が浜松市のあたりに仕事をしにいくことをどのように評価するでしょうか。大阪や東京に出ていくことをどう思いますか。おそらく，どれを取っても同じではないと思います。

例えば，札幌で北海道の人と話すと，「いやあ，俺は意を決して東京に行くんだ」という人は少なくありません。一方で「近くに仙台があるじゃないか」と思っても，北海道の人にとって，東京の存在は大きいのです。北海道で「おら，東京行くことを決めたんだ」と大きな声で汽車のなかで話している人を見かけたこともあります。皆さん，どうでしょうか。イメージはどうでしょうか，違いますか?

話を戻して，豊橋市と静岡の遠州とは文化的に似ている印象を受けますが，いかがでしょうか。もちろんこの間には県境がありますから，両地域は異なると思ってるような気もします。それとも，「いやいや，本当にこの二つの地域は似ているのだ」と思っていらっしゃる気もします。このようなことは，尾張地方の人間からしますと，岐阜県美濃地方との関係にみられます。中には「岐阜なんか田舎だ」という意見もありますが，言葉の面で似ているところは少なくないと思います。もしかしたら尾張地方は岐阜県美濃地方と同じ県になり，三河地方は静岡の遠州地域と同じ県になった方がよかったかもしれません。

これを踏まえると，尾張地方の私からすると，岡崎市から豊橋市にかけての地域の言葉についてあまり評価をしない一方で，岐阜市までの地域の言葉については，例えば，一宮市の言葉のように，言葉が粗くて汚いというような評価を行うことになります。実際，幼少期に，私の家族や近所の人が，「いや，あの人は，一宮から来

て言葉が汚いんだよ」ということを言っているのをよく聞きました。このような言葉の粗さの評価が，なぜ起こるのかということは非常に興味深い点です。どこかの特徴が耳について，それが何らかのかたちでマイナスの感情の評価になっているわけですが，なぜかということは研究をしなければなりません。

愛知県の方言について

ここで少し方言の研究で指摘されていることに触れます。すでに申し上げたとおり，愛知県には，尾張方言と三河方言があります。これにはもちろん美濃方言・遠州方言との関連がそれぞれ強いと言われます。三河方言は，さらに西三河方言と東三河方言とに分類することができます

ここでそれぞれを代表する方言を次にように挙げました。

（１）「じゃんだらりん」

（２）文末詞 尾張の「なも」西三河の「なん」東三河の「のん」

例：ひるげは赤味噌だ（なも / なん / のん）

（３）「ない」の発音：尾張[næ:][nja:]　三河[ne:]

三河地方の人であれば，もちろん「じゃん・だら・りん」ですね。この代表格が「ほだら」ですね。私自身「ほだら」を聞いたときには驚きました。この他にも「行きん」とか「食べりん」とか使いますよね。

以前，NHK から関東地方で使われる「じゃん」がどこから来たのか，取材を受けたことがあります。「じゃん・だら・りん」の「じゃん」ですね。三河地方がこの語形の発生の地なのです。

その一方で，尾張方言には「じゃん・だら・りん」に相当するものはあるでしょうか。では，名古屋を代表する言葉は何でしょうか。今日，名古屋からお越しくださった方，どなたか教えていただけますか。

○男性 A　「だがや」。

「だがや」,「がや」ですね。そうですね。その通りです。しかし，きっと三河の人も使いますよね?　「言うが」とか「言うがね」とかです。また,「あっ，ケンちゃ

んだが！」のように「驚き」を表すときに「がや」「がね」「がー」を使います。この「がや」「がね」「がー」にはこのような「驚き」を表す意味があると言われますが，この他にも相手に自分の意図が伝わっていることを確認する，確認要求表現としての意味機能を持っていたりします。ここで，少しだけこの用法について説明しましょう。ここでは「がや」「がね「ガー」を「ガ」として表します。「ガ」には，（１）確認要求用法（２）情報提供用法があります（朝日 2001)。次にいくつか例を出します。

（１）確認要求用法として

(4) [タクシーの運転手に行く先を指示して]

あそこに郵便ポストが見えるガ。すぐ先の角を右に曲がってください。

(5) [帰りの遅い夫を非難して]

妻:おそいねー。

夫:しょうがないガ。仕事忙しかったから。

(6) だから言ったガ。あの人には気をつけなさいって。

(7) お前，けがしとるガ。

(8) [開けてみたら中身が空なのを発見して

なんだ，空っぽだガ。

（２）情報提供用法として

(9) A: 中日もいまいちだめだな。

B: 何いってるの。がんばってる{ガ/よ/??じゃないか }

(10) A: おい，とないだ，そこのマクドで女の子といるのを見たぞ。

B: あ，ただのクラスメートだ{ガ/よ/じゃないか}

(11) お前，社会の窓が開いてる{ガ/よ /じゃないか}

(12) もう，終電だ{ガ/よ/??じゃないか}

このような言い方がありますが，みなさん使いますか？

皆さんが使うかどうかは別として，よく言われるとされるものに「なも」があります。「そうだなも」「大きくなったなも」などです。私自身は使わないのですが，

祖父母の世代は使っていました。もう 30 年くらい前に，祖母の妹が使っていたのを聞いたのが最後です。これに相当する三河方言ですが，西三河方言では「なん」，東三河方言では「のん」となります。なので尾張方言では「ひるげは赤味噌だなも」，三河方言では「ひるげは赤味噌だなん」「ひるげは赤味噌だのん」となるわけです。

この他は「ない」の発音だけではなく，いわゆる「あ・い」「あ・え」の発音をするときに，「あ・い」の場合であれば，三河方言では「ね(ne:)」に変わったり，尾張方言では「ねあ(næ:)」だったり「にゃ(nja:)」になったりするといわれます。

この特徴は，私の母方言には普通に見られるものです。この中でも「ねあ(næ:)」は英語の勉強をする英語で皆さんが勉強した発音です。これが尾張方言にあるのです。これは，「え」の口をして「あ」と発音します。例えば「ギャップ」とか「キャップ」の「ァ」の部分の母音です。近年，この発音は「や」の音に変わりつつあると言われますし，私も同じような印象を持っています。

次に，尾張方言・三河方言の中で先ほどの例ほど代表的なものではないのですが，取り上げたい表現を示します。

（13）「しない」：尾張も三河も「シン」

（14）「いらっしゃる」：尾張：「ゴザル」尾張・三河「ミエル」

（15）「失礼します」：尾張・三河：「ゴブレーシマス」

（16）「…をください」尾張「チョーダィ」

西三河「オクレヤス・オクレン」

東三河「オクレンサイ・オクレン」

ここに挙げた例の一つは動詞「する」の打ち消しを表す語形です。つまり共通語でいう「しない」は尾張方言でも三河方言でも「しん」となります。なので，例えば，「あんなゲームもうしないわ」は「あんなゲームもうしんわ」となるわけです。この「しん」は愛知県で広く使われている言い方なので，この語形を東京などで耳にすると「この人，愛知県の出身かも」と思ったりします。

ここで挙げた動作を打ち消す表現のうち，例えば「しない」を「しない」のまま使うか，「しん」「せん」などというのかによって，その使用される地域が決まって

来ます。つまり，否定表現としての「ない」と「ん」は東日本・西日本の方言形であると言えます。実際，これは日本の言葉を二分する，言葉の東西差を表す例として方言学の研究においても広く知られています。

三河地方から尾張地方にかけての地域には，このような言葉の東西分布を形成するような特徴を持つ言語表現があります。基本的にはその境界線を総合すると，尾張地方には西日本方言的な特徴が多く，三河地方に行くと東日本方言的な特徴が多いと言えそうです。もちろん言語表現によっては，愛知県全域で使われている語形が西日本方言的，または東日本方言的な特徴であるものもあります。ですから，愛知県の歴史の中でも，西日本，東日本の方言が衝突してきたと言えます。

なお，愛知大学のある豊橋市の文化は果たして東日本的なのか，西日本的なのかという点になりますと，たんに東日本としてしまうことには様々な意見が出てくる可能性があります。これは，例えばうどんのつゆの色がどうだとか，雑煮のお餅の形，雑煮に入れる具材などなどを挙げたとしても，さまざまな分布がありそれに文化の地域差を見定める視点も必要です。ただ，その一方で愛知県にしかない，かなり独特なものもあります。

ここで挙げた特徴の二つ目と三つ目は愛知県方言としては特色のあるものです。目上の人や年長者に向かって話すとき，つまり敬語を使うときに使われる言い方を扱います。例えば「学校の先生が家庭訪問で生徒の家に来る」という時，先生が「いらっしゃる」という意味で「ミエル」ということは少なくないはずです。また身内の目上（親や親類など）が家に来ることを「ゴザル」また家にいることを「ゴザル」ということがあります。この「ゴザル」は尾張地方の方言形として知られます。私も名古屋にある実家に帰るときに，家でゆっくりしている親に向かって「あ，ござった」ということもあるくらいです。このような方言の敬語は尾張方言の方が三河地方よりも発達していると言われます。

これに関連したものに「失礼します」という意味で，「ゴブレーシマス」という言い方があります。「無礼する」という言い方が由来となり現在でも使用されるものと考えられます。愛知県の方であれば，目上の人に向けて，自分がその場を離れない

といけない場合,「これで失礼します」というところを「これでゴブレーシマス」と言うことがあります。かれこれ 10 年前に岡崎市で敬語の調査をしたことがあります。そこでお世話になった岡崎市役所の女性の職員の方と会ったとき，別れ際に当時国立国語研究所の所長と一緒にいた私たちに向けて,「ここでゴブレーシマス」と言ってくださいました。

この他には，例えば,「何々をください」と言う言い方にも尾張地方では「チョーダィ」「チョーセエ」などのように言います。一方西三河方言では「オクレヤス」「オクレン」，東三河方言では「オクレンサイ」「オクレン」と言います。愛知県と一言で言っても実に様々な方言形が存在していることがわかります。

次は日本語の「語アクセント」についてです。日本語の音は，平仮名で書くと一つ一つの文字に対して，高いイントネーションと低いイントネーションのどちらかで発音されることがおよそ決まっています。その「高さ」「低さ」の組み合わせ方により，語の音色が決まり，語の意味も決まります。それを調べ上げていきますと，一定の傾向が見らます。一方で語とアクセントとの関係に見られる必然性についてはなかなか説明ができないのですが，他方でアクセントの形にはいくつかのタイプに止まるものだと言われます。その意味で日本語のアクセントには規則が決まっています。

この規則によると，愛知県方言のアクセントは，東京で使われるアクセントとどのような関係なのか，また大阪・京都を中心とする京阪地域のアクセントの形とのような対応関係があるのか，議論が行われます。

愛知県は，基本的には「東京式アクセント」と言われます。基本的には，愛知県方言の語アクセントは，東京と大きく変わりません。ただ，同じでもありません。ですから，今，みなさんが特に言葉遣いに気を配らずに，東京で友人と話していたら，周りの人には「あっ，自分たちと違うかも」というような印象を与えてしまうので，その意味では覚悟をされた方がいいように思います。

(6)アクセント：形容詞「赤い」

尾張「○●○」三河「○●●」東京「○●●」

擬声語・擬態語「クヨクヨ」

尾張「○●○○」三河・東京「●○○○」

代名詞「どちら」「どなた」「どんな」

尾張・三河「○●●」東京「●○○」

上の例は，尾張地方・三河地方の語アクセントを東京方言のアクセントと対照させたものです。ここでは語アクセントについて，黒い丸印が高いイントネーション，この白色の丸印が低いイントネーションで実現されるとします。ここでは，いずれも，尾張地方・三河地方・東京でそれぞれ実現形が異なるものです。

例えば，「赤い」という形容詞については，三河方言と東京方言では「あかい(○●●)」と言いますが，尾張方言では「あかい(○●○)」と言います。これは尾張方言と三河方言で語アクセントが異なります。この語については，東京方言と同じアクセントは三河方言です。なので，三河方言は日本の標準語の礎をなったという方はどうぞ喜んでください。

次にいわゆる「オノマトペ(擬声語・擬態語)」の例である「クヨクヨする」という言葉についてです。三河方言と東京方言の語アクセントでは「クヨクヨ(●○○○)」となります。尾張方言では「クヨクヨ(○●○○)」となります。さっきは三河地方の語アクセントが東京と同じでしたが，この例では尾張方言の語アクセントが東京方言と同じになります。

3 番目も愛知県方言ならではの特徴であす。ここでは疑問詞「どちら」「どなた」「どんな」ですが，この語アクセントはどうなるのでしょうか。愛知県においては尾張地方でも三河地方でも共通して，「どちら(○●●)」「どなた(○●●)」「どんな(○●●)」というように，1 拍目が低くて 2 拍目が高くなります。東京では「どちら(●○○)」「どなた(●○○)」「どんな(●○○)」となります。「どちらさんですか?」と言いますと，「どちら(●○○)の方ですか」か「どちら(○●●)ですか」とでは聞こ

え方が違うはずです。もちろん「どちら(○●●)」が愛知県の方言における語アクセントだといわれます。この例は私としては，愛知県の方にはピンときてほしいのですが，いかがでしょうか。

この他に三河方言で知られている例をいくつかご紹介したいと思います。最初にあげるべきは，「方弁」という言い方です。これは「方言」という意味で使います。これは三河地方の人から聞いたのですが，方言のことを「方弁」と言う人が，比較的いるように感じまして，それは，例えば，三河弁の「弁」が「方言」にひっついているのか，あるいは「方言」という単語を聞き間違えて「方弁」と覚えているのかどっちかというものです。愛知県の方言を研究している先生方によると，西三河方言でも東三河方言でも使用が認められるようです。ただ，これを使うのは高年層の方に限定されるものなので，若年層の間では使われないようです。

次が「にぎやかい」や「じょうぶい」のような言葉です。これらは，尾張方言でも使う語形ではあります。いずれも，「にぎやかだ」「じょうぶだ」の「だ」を「い」に交替させるものです。いわゆる形容動詞を形容詞として使う例だと思います。

標準語を使っているのか

さて，少し話の内容を変えたいと思います。ここでは皆さんにとっての「標準語」についておたずねします。まずは，皆さんにとっての定義で構いません。皆さんが使っている言葉は，標準語ですか？そうお考えの方，どの程度，標準語を話していると思いますか。

私のこれまでの話をお聞きになると，「いや，自分は標準語とは違うかも…」と思うかもしれません。なので，この時点では私の言ったことはどうか忘れてください。「日常生活で標準語を使っていますか?」という問に「使っていると思う」という方は手を挙げてください。あまり深く考えることはありません。(挙手)　皆さん，周りをよく見てください。決して少なくはありません。東京都出身の松田先生にお尋ねしたいのですが，日常生活で標準語を使っていますか?

○松田　はい。

ありがとうございます。実は東京都出身の松田先生の「はい」と，皆さんの「はい」との意味には，大きく異なります。東京都出身の人は，「標準語は使っていません」と多くの場合答えますが，実はその判断基準は愛知県に住む人と比べると厳しいものがあります。おそらく，東京都の人の使う「普段の言葉」は愛知県の人からすると極めて標準語的なものがあります。

皆さんにとっての方言と標準語。仮に，皆さんご自身で評価をしてほしいのですが，方言と標準語のうち，どちらを多く使っていると思いますか。「標準語のほうを多く使っていると思う」という人は手を挙げてください。(挙手)　「いやいや，方言だよ」という人は手を挙げてください。(挙手)　ありがとうございます。方言という人，頑張りましょう。私も頑張ります。

ちなみに，東京で地元の人にあったとしましょう。なので，松田先生のような東京の人に東京で会うという意味ではありません。例えば皆さんが東京で仕事をしていて２カ月くらい経ったときに，地元の友達から連絡がありました。「おう，今から週末東京に行くんだけど，会わない?」「うわあ，久しぶり。会いましょう」ということになって東京駅の新幹線のホームで会ったとします。そこで当然話をすると思うのですが，そのときに，「方言で話すと思う人」は手を挙げてください。(挙手)　東京ですよ，豊橋駅ではありません。「よくわからない」という人はいますか。(挙手)素直でいいですね，ありがとうございます。経験がないとか，話したことはあるけれども考えたこともないという人がいるかもしれません。今度，東京で地元の人に会うことがあれば考えてみてください。

1 年ほど前になりますが，中学校の同級生と東京で会いました。その人とどのように話したか全てを思い出すのは難しいですが，たしか。私は名古屋方言で話した気がします。ただ，周りの耳も目もありますから，どこまで名古屋にいたときと同じように話したかはわかりません。

青森県で同じ質問をしますと，おそらく，答えは大きく異なると思います。弘前の友達と弘前で話をするとすれば，「方言で話す」と答えるのはほぼ 100 パーセントになると思います。続けて「東京で話すとしたらどうなりますか?」と聞くと，多

くが「共通語で話す」と答えるはずです。「どうして共通語で話すのか?」と聞きますと,「いやいや，東京だから…。東京で話すんだから共通語でしょう」と言うわけです。

この感覚は，おそらく愛知県民の持っている意識とは異なると思います。みなさんの中には,「いや，私は普段から標準語を話してると思っているんだから，東京に行っても標準語のままじゃない」とお考えになるのが普通だと思います。山手線に乗っていると,『るるぶ東京』を持った観光客が大きな声で話をしているのが聞こえてきます。東京にいるのだから全員，標準語で話していると思いきや，方言を使う人がむしろ多いことに気づかされます。東北から上京した人が，田舎が恋しくなった結果，東北弁を聞きに上野駅に出かけていくようなものです。

標準語使用意識の強い愛知県人

実は，普段の生活では方言を主に使うという人が少なくないかもしれません。しかしながら現実的には，愛知県の人間であれば，おそらく標準語意識は強いと思います。おそらく高校生くらいまでの年齢の人であれば，自分の言葉に方言を見つけることが難しいと感じていらっしゃる人が少なくないはずです。おそらく，よそに出て初めて，自分の使っている言葉に違和感を覚えるかもしれません。もし，それをやりたければ，ここからだと遠いですが，東海道線に乗って大垣駅くらいまで行きますと，自分たちの住んでいる言葉と大垣の言葉が違うことが認識できると思います。

私が２０年程前，大阪の大学に通っていたときに，名古屋から大阪へ戻るときに普通電車に乗っていました。名古屋から京都に近づいていくにつれ言葉が変わっていきます。「ああ，何か言葉が違うな」と思うのと同時に，果たして自分を標準語と同じとみなす地域はどこまでなのかと，考えずにはいられませんでした。もちろんこれは地元を離れなければわからない感覚でもあります。もちろん，地元に住んでいれば，自分たちがずっと標準語を使ってきたんだからと思うのも当然です。

東京の標準語と愛知の標準語

スライドには「東京の標準語と愛知の標準語」と書きました。例えば，「寝れる」「食べれる」「信じれる」「考えれる」という動作を示す言葉です。「皆さん，使いますか?　使いませんか?」「寝れる」「やっと寝れる」と言えますか。「やっと食べれる」は，「まあ，腹減ってまっていかんわ」という感じで，「食べれるな」という感じですね。では，これはどうですか。「信じれる」「あの人の言うことだで信じれるわ」，これはオーケーでしょうか。「信じられるわ」と言うのと，どちらが自然ですか。「信じれる」ですか，「信じられる」ですか。東京で「信じれる」と言いますと，おそらく多くの東京の方が困惑します。

これらはいずれも「ら抜き」言葉の例ですが，「ら抜き」言葉は，愛知県の方であれば，旧来から使って来た言葉です。ただ，「信じれる」「考えれる」となると，少し話が変わります。「考えれる」と言いますと，言えたり，言えなかったりしますが，おそらく，この三河地方であればこの言い方に問題を感じない人がいるようにも思うのですが，いかがでしょうか。

「考えれる」と言えそうですか。「いや，言えるよ」と思う人はいらっしゃいますか。(挙手)　挙がりました。一人でも手が挙がればいいです。「いや，いえない。『考えられる』『信じられる』でしょう」という人はいますか。(挙手)　「よくわからない」という人はいますか。

では「書ける」と「書けれる」，「行ける」と「行けれる」，「飲める」と「飲めれる」はどうでしょうか。この「飲めれる」「行けれる」「書けれる」と，皆さんは言えますか。数人の方は，ちゃんと質問の直後に反応してくださっていますが…。ちなみに「言えるものがある」という人はいますか。いや，どなたもいならっしゃらないのですね。これらは言わない，ということも含めて皆さん，気づいたら教えてください。ただ，地域によってはこれらは「レ足す」言葉といって，「書くことができる」の意味での「書ける」の「け」と「る」の間に「レ」をいれてしまう現象のことを指します。

気づかない方言

次に愛知県の方言における「気づかない方言」を取り上げます。これは，実は方言だと気づかずに使ってしまっている方言です。なので，これを他地域で使っていると通じないことに気づきます。これからいくつか例を出していきますので，一緒に考えたいと思います。まずは図１をご覧ください。

図１　とがった鉛筆を指すオノマトペ

図１のように「鉛筆をこのようにすることをどうすると言いますか」という問いに対して，「トキントキンにする」と言いますが，皆さんは言いますか。「聞いたことはある。使う」という感じの人は手を挙げてください。(挙手)　ありがとうございます。

実は，東京女子大学の篠崎晃一先生が「出身地バレ語」(『出身地(イナカ)がわかる!気づかない方言』)という気づかない方言のことをまとめた本を出していらっしゃいます。愛知県民のバレ語は何かといいますと，これです。「トキントキンにする」という言葉です。思ったほど反応があるわけではないのが残念ですが。自分は使っていないけれども，家族は使っているとか，名古屋の友人が使っているということでもあれば，うれしいです。次は教室場面での出来事です（図２）。

図２　授業と授業の間にある休み時間のこと

次です。「学校の授業と授業の間にある休み時間のことをなんと言いますか」，これは「何時間目の放課」と言いませんか。そうですよね。みなさん，言っていましたよね。これは絶対に東京で使わないでください。意味が変わります。おそらく「放課」と言いますと，学校が終わった後のことだと思います。この「放課」も愛知県で使われる言い方です。次の例をみてみましょう（図３）

図３　コーヒーに入れるミルクのこと

「コーヒーに入れるミルクのことをなんと言いますか」，答えは「フレッシュ」です。皆さん，もちろん言いますよね？　ちなみに，私の家の近くにあるコメダ珈琲店に行くと何が起こるか，皆さん，ご存じですか？　アイスコーヒーを近くの喫茶店で

頼みますと，「ガムシロップ」とか，「ガムシロ」と言いますよね。そのコメダ珈琲店では，そうは言わないんです。「甘くするものを入れてもよろしいですか?」と言われます。「甘くするものを入れるってなんだ?」と思いました。これは方言なのかどうかもわかりません。おそらく会社のマニュアルであると思いますが，「甘くするものを入れる」という表現はおかしい気もします。では，次の例を見ましょう（図４）

図４　「疲れた」ことを「エライ」というか

ここでは「『疲れた』ことをここではどう言いますか?」という例です。「エライ」「エレエ」と言います。この「疲れた」と言う意味での「エライ」を知らずにこの語形を聞くとなんだか自分が偉くなった気持ちにさせます。これは意味が違うわけです。ちなみに，「疲れた」と言う言い方には様々な語形が存在しています。例えば，北海道や東北などに行くと，「疲れた」と言う意味で「こわい」が使われます。別に恐ろしいと言う意味ではなく，「疲れた」と言う意味になるんです。あるとき，札幌で調査をさせてもらったお年寄りの方が，休憩から戻ってきて椅子に座った途端，「アーコワッ」と言っているのを思い出します。「疲れた」という言い方には実に様々な表現があるのですね。では，次の例を見てみたいと思います。今度は，教室で起こる場面で使われることばです。みなさん使いますでしょうか（図５）

図５机を運ぶこと

「教室の掃除などで，机を運ぶことをどうすると言いますか?」と，「机をつる」と言います。「ツル」は持ち上げる動作だけではなく，一定の空間の移動も意味します。なので，「はい，机つって」というと，机を前から後ろに，後ろから前に運ぶと言う意味になります。皆さんの中で「机をツル」と「言ったことがある」という人はどれだけいますか。(挙手)　「言わない，聞いたことがない」という人はいますか。(挙手)　なるほどこれは尾張方言の特徴かもしれません。では，次の図です（図６）

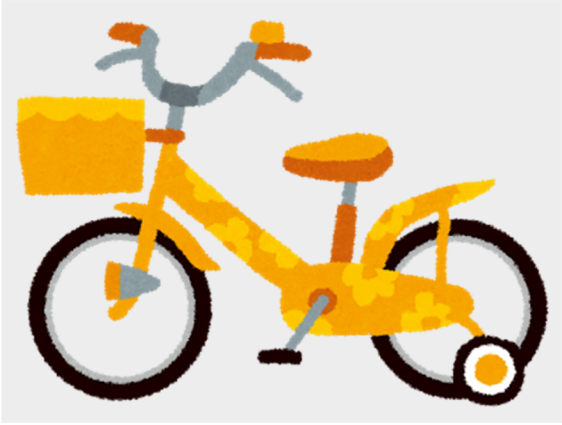

図６　自転車の補助輪

あと，これです。補助輪のことを「ワッカ(輪っか)」と言いますが，これはあまり拒否感がないですね。これも愛知県の方言としてはよく知られている語形です。ち

なみに自転車のことを「ケッタ（またはケッタマシーン）」というのも尾張方言では見られます。ただし，最近の若い人たちは「ケッタ」ではなく「チャリ」を好むと聞いたこともありますが，みなさんいかがですか？

方言を役割・意味を改めて考える

ここまで様々な例を取り上げました。いかがでしたでしょうか。方言の定義は，さまざまあります。なので，ここで申し上げるのが全てではありません。ただ，日常生活で扱っている言葉を方言と仮に定義するとしますと，先ほど申し上げてきた言葉は，日常生活で使って来ていることばなので，「方言」とみなしていいと思います。もちろん，これまで方言とされてきたものはたくさんありますが，それが使われなくなってきている現状があります。それを踏まえると，これまでの方言を引き継ぐものとして，このような言葉が存在するようにも感じます。

また，この方言の話にもつながりますが，東京にも気づかない方言があります。東京の人は，大概「普通のことば＝標準語を使っている」と言います。ただし，東京で生活していると耳にする言葉があります。例えば，「片付ける」という意味で「かたす」を彼らは使うんです。これは国語辞典にも載っている方言形です。この他にも勧誘表現としての「ベー」や「煩わしい」という意味での「ウザッタイ」などがあります。なお，スライドには，「東京に住む人は標準語を使っていると疑わない」と書きました。直接的に「標準語を使っているか」と聞くと「使ってはいない」と答えるのですが，彼らの気持ちとしては，標準語を「使っている」ことを前提にしつつ，きちんと標準語を使いこなせない可能性を危惧しているのが理由であることを忘れてはなりません。これは，残念ながら愛知県民の意識構造とは異なります。

愛知県のことばのこれから

趣旨説明にもありましたが，「言葉」というのは変わっていくものです。どのように変わっていくのかは，実際，言葉が変わってからでないとわかりません。また，言葉が変わらない，ということはありません。言葉が変わっていなければ，例えば，

『源氏物語』や『万葉集』の時代の日本語を現在でも使用しているはずです。これらの作品を原典では読めないことだったり，古語辞典が存在する以上，言葉が変わっているということになります。言葉はこれからも変化しつづけるものです。その変わり方を見つめていくのが，われわれ研究者のミッションだと考えます。

「方言がなくなる」といいます。もちろん特定の方言形はなくなっていくわけですが，根本的にはなくなりません。もちろん，今後一層標準語使用意識が強くなっていきます。ただ，先ほど申しましたように，気づかないような方言を標準語と思い込んでいたわけですし，愛知県の方言が体系的にも，そこまで標準語と一緒でもないということを考え合わせると，愛知県の言葉自体は，今後も形を変えつつ生きき続けていくのではないかと考えます。

ですから,「地域標準語　vs.　地域方言」と書きましたが，これは皆さんのなかの言葉に対する捉え方と深く関わっていきますので，もし，よろしければ，皆さんと，これからも考えを深めていければうれしいところです。ご清聴，ありがとうございました。

【参考文献】

朝日祥之（2001）
「名古屋市方言における文末詞『ガ』」阪大社会言語学研究ノート２
江端義夫編　平山輝男編集代表（2013）
『日本のことばシリーズ２３　愛知県のことば』明治書院
日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一編（1998）
『講座方言学 ６　中部地方の方言』国書刊行会
篠崎晃一・毎日新聞社編（2008）
『出身地（イナカ）がわかる！気づかない方言』毎日新聞社